

2022年度 特別研究期間制度 適用者

所属	氏名	職位	種別	期間	主たる研究国	主たる研究先	研究題目	研究報告	備考
文	麻生 えりか	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	本学	アジアの戦争の再グローバル化—現代イギリス小説家たちの二世界文学	・加筆修正した「暴力を描くこと、小説を書くこと—『歳月』、『幕間』、ヴァージニア・ウルフの晩年」が論集『書くことはレジスタンス—第二次世界大戦とイギリス女性作家たち』（音羽書房鶴見書店、2023年）に収録された。 ・論文「The Representation of the Sino-Japanese War and Cosmopolitanism in Empire of the Sun, When We Were Orphans, and My Shanghai, 1942-1946」を執筆、投稿した。論集Japanese Perspectives on Kazuo Ishiguro (Palgrave Macmillan, 近刊)に収録予定である。 ・論文「第一次世界大戦を描くウルフの「三部作」—『ジェイコブの部屋』『ダロウェイ夫人』『灯台へ』を執筆した。モダニズム文学研究と戦争表象研究の接点を探る現在準備中の単著に収録予定である。	
文	McCREADY, Elin S.	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	ドイツ	Leibniz-Zentrum Allgemeine Sprachwissenschaft	Linguistic and Philosophical Research on Social Meaning and Concepts: Gender, Family, and Political Speech	My main topics of research during the sabbatical period were linguistic and philosophical approaches to issues in political speech and harm and problems of the interpretation of literature within formal approaches to natural language meaning, as well as, within my artistic activities, questions of the nature of family, the relation between human and nonhuman, and poetic interpretation and power. I published several papers, finished several books, and gave a large number of academic talks during the sabbatical.	
文	荒木 善太	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	本学	市民社会の聖と俗—19世紀フランスにおける信仰としての芸術	本研究は、美術館としての「ルーヴル」の誕生の背景と市民社会におけるその変容を辿ることで、フランス近代をイメージの崇拜の時代として位置づける試みである。研究期間の前半では、革命の所産としての「共和国の美術館」の成立の背景を、後半では、19世紀における市民社会の成熟と「信仰としての芸術」の俗化の過程を対象にそれぞれ検証を行った。	
文	岩井 浩人	准教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	①日本 ②ロシア	①本学 ②ロシア科学アカデミー極東支部	古代・中世移行期の社会変動に関する考古学的研究	本研究期間中は、日本列島北部における古代・中世移行期の集落遺跡について現地調査と出土遺物の実見を進め、集落構造や囲郭施設の諸機能、成立時期、出現背景等について考古学的視点から考察した。その成果は論攷等として順次公表する予定である。また、計画していたロシア極東地域での活動は断念したものの、古代東北アジアの考古学的研究の一環として、編著『渤海「日本道」に関する海港遺跡の考古学的研究』（青山学院大学総合研究所 研究成果論集）を年度末に刊行した。	
経済	遠藤 光暁	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	本学	最古期日朝漢字音研究	「最古期日朝漢字音研究」は呉音・漢音などの8世紀の日本漢字音とほぼ同時期の朝鮮漢字音よりも前の時代の漢字音を研究し、その相互関係や由来を探ることを目的としていた。主として『三国史記』の朝鮮古地名・人名・官職名を対象として、韓国・日本の遺跡の实地踏査も行い、古墳時代よりも更に古い弥生時代に遡る日朝共通の一連の地名があることが明らかになった。これは人類集団の移動ルートや時代およびその原因なども物語るものであり、7世紀以前の東アジア諸民族の動態を反映する興味深い成果が得られた。逐次論文や単行本でその成果を公開していきたい。	
法	安藤 泰子	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	①本学 ②明治大学比較法研究所	刑罰権の哲学的基礎	特別研究期間を通し、法人類学的視点から刑法の起源に遡り刑法がいかに生成し、どのような刑罰観をもって展開し現在に至ったのか、その史の変遷を俯瞰する作業を行った。刑法が分化してきた史実を踏まえ、「国際刑法もまたその分化の連続として捉えられ得るものではないか」とのテーゼについて、古代に遡り刑法の連続性と同質性の検証を行った。	
経営	安 廷苑	准教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	本学	「ムーテル文書」の調査および研究	第8代朝鮮司教ギユスターヴ・シャルル・マリ・ムテル(Gustave— Charles— Marie Mutel, 1854-1933)が約半世紀の在任中に収集した文書群の調査、研究を行った。「ムーテル文書」と呼ばれる同文書群とローマ、イエズス会文書館所蔵文書との関連を考察し、パリ外国宣教会所蔵の朝鮮関係文書との比較研究を実施した。その結果、前近代のイエズス会から近代のパリ外国宣教会へと布教主体が移行する際、ヨーロッパに伝達された東アジア情報には連続性が見られる反面、教会法の適用には変化があることが明らかになった。その視点で婚姻関係史料を分析し、論文執筆と学会報告を行った。	

2022年度 特別研究期間制度 適用者

経営	横山 暁	准教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	本学	マーケティングデータに対するソフトクラスタリングの適用に関する研究	ホント区別研究機関において「マーケティングデータに対するソフトクラスタリングの適用」に関する研究を実施した。具体的には、既存のソフトクラスタリングの分析法に対し、非対称データを分析できるようにするための理論研究を行った。また関連して、非対称クラスター分析法をマーケティング関連のデータに適用する応用研究にも従事し、共同研究としてGPSデータを用いた観光エリア間の移動データの分析を実施し、論文を執筆した。
経営	佐藤 亨	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	-	本学	T.S.エリオットの詩と詩論の研究	「1922年秋、ケインズは『荒地』を朗読した」、『四月はいちばん残酷な月—T.S.エリオット『荒地』100周年記念論集』(水声社、2022年12月)、『『そこに宿る ジブシーの魂が』— ポーラ・ミーハンと出会う』(『現代詩手帖』2023年2月)、『植民地と故郷—清岡卓行、三木卓、後藤明生(後半2)』(『青山経営論集』第57巻別冊、2022年12月)。
国政	倉松 中	准教授	長期 (1年)	2022.9.16 ～ 2023.9.15	①イギリス ②日本 ③アメリカ	①国立公文書館(TNA)、大英図書館 ほか ②防衛研究所戦史研究センター史料室、外交史料館 ほか ③国立公文書館(NA) ほか	戦間期の軍縮への取り組み：海軍軍縮と武器取引規制について	特別研究期間申請後にウクライナ戦争が始まったことをきっかけとして、申請時のテーマを若干変更し、戦間期の軍縮とも深く関連する、国家間紛争の解決手段としての戦争の国際法上の位置づけを180度転換した不戦条約の成立過程について、主にイギリス外務省の文書を元に研究した。不戦条約を締結した政策決定者の認識に焦点を当てた内容の論文を執筆して発表の予定である。
総文	飯笹 佐代子	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	①日本 ②オーストラリア ③カナダ ④ドイツ	①本学(2022/4/1～2022/6/30) ②西シドニー大学(入国規制の解除が前提) ③モントリオール大学(入国規制の解除が前提) ④国際芸術祭ドクメンタ(カッセル)等での短期調査	アート(文化芸術)の社会的意義と可能性—難民問題、多文化共生を中心に	特別研究休暇中の研究および実施中の科研費共同研究「オーストラリアにおける(ポートピーブル)の脱/安全保障化をめぐるポリティクス」の成果として、以下の2冊の出版企画を編者の1人として企画し、今年度中の刊行を目指して準備中である。 ・共編著として『モビリティーズの社会学』(仮題) 有斐閣 ・共編著として『移動と境界—越境者からみるオーストラリア』(仮題) 昭和堂
地球	藤原 淳賀	教授	長期 (1年)	2022.9.1 ～ 2023.8.31	-	本学	平和(シャローム)を作り出す修道院的靈性の研究	「ロシア正教会はなぜ大統領を批判できないのか?」『日本カトリック神学会誌』第34号(2023.8.) 「キリスト教社会倫理学における絶対性と相対性:21世紀の戦争の時代における日本の教会のために」日本基督教学会第71回学術大会発表(2023.9.7.上智大学). 「ロシア正教会と国家:キリスト教信仰とナショナリズム」『信徒の友』(2023.7.) 「ロシア正教会はなぜプーチンの戦争を支持するのか?」『キリスト教書総目録 2023年版』. 『ファンダメンタリズムとは何か』翻訳・訳者あとがき(日本キリスト教団出版局から出版予定).
国マ	須田 敏子	教授	長期 (1年)	2022.9.1 ～ 2023.8.31	-	本学	①外国籍学生の採用と活用 ②資本国籍によるグローバル人材管理の比較(含む日独チームでの共同研究) ③サステナビリティ実現のための人事の役割	ますます重要性を増す外国籍高度人材の採用と活用をテーマに企業に対するケーススタディを実施。理論的フレームワークとして、制度理論とRVBをベースに構築したDiversity & Inclusionに関する2ステージモデルからの分析という革新性・新規性の高い研究成果を達成した。 変化する日本型人事の行方を、過去20年以上にわたる研究に基づき欧米と日本の豊富なデータに基づき「ジョブ型・マーケット型人事への変化」を学界で初めて指摘するなど、こちらも革新性・新規性の高い研究成果を達成している。